

妄想的観念および妄想に関する研究の概観

金子一史¹⁾

はじめに

他者の何でもない行動やしぐさを自分に向かられたものを感じ、自分に関連づけて物事を被害的に判断することは、一般生活の中でも珍しい事ではない。誰でも、自分が恥ずかしいことをしたり、対人場面で失敗したりしたときには、周囲の視線が気になったりするものである。その際、「あそこで2~3人が集まって小声で話をしているのは、自分の事を言っているのではないだろうか」とか「こちらから話しかけたのに返事をしてくれないなんて、あの人は私を無視しているのだろうか」などと考えることは、十分あり得ることである。近年、一般青年において、上記のような被害妄想的な観念を体験しているという指摘が、相次いで報告されるようになってきた(Fenigstein & Venable, 1992; 丹野・石垣・杉浦, 2000)。本研究では、関心が高まりつつある妄想的観念についての研究を概観する。妄想的観念に関連する研究の中で、実証的な心理学的手法を用いて取り扱ったものは、以下の2つのアプローチに大きく分類できる。

第1のアプローチは、一般青年の妄想的観念を対象としたものである。第1のアプローチは、一般青年の中で妄想的観念傾向の高い人に注目して検討している研究をさす。これらの研究の多くは、社会心理学領域における自己意識理論を基盤にしている。自己意識理論を一般青年における妄想的観念に適用して、その特徴に迫ろうという研究である。

第2のアプローチは、精神障害者における妄想を対象としたものである。第2のアプローチは、実際に妄想を持っている精神障害者を対象にして、妄想の心理学的特徴に迫ろうとする研究をさす。これらの研究は、妄想を持っている精神障害者に対して様々な心理学的実験や質問紙調査を行っている。その際、対照群として一般健常人を被験者に設定して、臨床群と対照群の差異を検討し

ている。これらのアプローチは、1980年代の後半から注目を集め始め、1990年代に入って盛になり、現在も研究報告が増加し続けている分野である(レビューとして、Garety & Freeman, 1999)。この背景には、一般心理学で発展してきた様々な理論を、今まで理解不可能と考えられていた精神障害の症状である妄想に適用することにより、妄想に対する新たな知見を獲得し、ひいては精神障害者の理解を促進しようとするねらいがある。適用される理論としては、社会心理学領域における Higgins (1987) の自己不一致理論(self-discrepancy theory)や、発達心理学領域における心の理論(theory of mind)などがある。以下では、2つのアプローチそれぞれについて、概観を述べる。その後、妄想的観念と妄想との連続性について検討し、最後に今後の課題をあげる。

社会心理学領域における自己意識からのアプローチ

自己意識理論は、社会心理学の領域で盛んに研究されている概念である。自己への注意の焦点付けを系統的に研究したのは、Duval & Wicklund が最初であるといわれている。彼らは、鏡などの自己への注意を高めるような刺激を使用して、自己に注意が向けられた状態での被験者の様々な活動を検討した。それらの結果を総合して、自己客体視理論(Objective Self-Awareness Theory)を提唱した。その後、実験的に操作を行うことで状態的な自己への注意の焦点付けを検討するだけではなく、特性的に自己に注意を向けやすい傾向の人を測定するために、自己意識尺度(Self-consciousness scale)が作成された(Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)。Fenigstein et al. (1975) 以後、自己意識尺度を使用した研究は精力的に行われており、自己意識に関する知見は現在も蓄積されつつある。自己意識理論の立場から一般青年の妄想的観念を検討しているものには、Fenigstein の一連の研究がある(Fenigstein, 1984; Fenigstein & Venable, 1992; Fenigstein, 1995)。

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

自己意識と関係念慮との関連

Fenigstein (1984) は、自分自身が他者の注意や批判の対象となっていると思いこむ認知的歪みを自己標的バイアス (self-as-target bias) として、自己意識との関連を検討した。その結果、自己を社会的対象として捉える傾向の強い人、つまり公的自己意識の高い人は、他者の行動が自己に関係しているという推論を避けることが難しいとしている。

Fenigstein (1984) の実験 3 では場面想定法を使用した。自分と登場人物の対人状況に関する仮想場面を被験者に提示して、登場人物の行動が自己を標的としているものかどうかをたずねた。使用した仮想場面の例の一つは、知人と挨拶をせずに廊下ですれ違った場面であり、被験者にその状況を想像するように求めた。そして、知人が考え事に夢中で気づかなかったのか、知人が自分との会話を避けようとしていたのかの 2 通りの理由が提示され、それぞれどの程度あてはまると思うか被験者に回答を求めた。その結果、公的自己意識の高い被験者は、公的自己意識の低い被験者に比べて、有意に他者の行動が自己に向けられていると捉えやすいことを示した。また、Fenigstein (1984) の実験 2 では被験者グループの中から 1 人を、楽しいあるいは楽しくない見本実験の被験者として、無作為に選んだと告げた後、その人物が自分である可能性を推定させた。その結果、公的自己意識の高い被験者は公的自己意識の低い被験者に比べて、実験者に見本実験の被験者として選ばれると推測しやすいことを示した。

また、Fenigstein & Venable (1992) は、一般的な人における妄想的観念をパラノイアとして検討している。Fenigstein & Venable (1992) のパラノイアは、精神障害における臨床疾患としてのパラノイアをさしておらず、より一般的に見られる妄想的観念を意味している。彼らは、パラノイア思考を測定するために、MMPI から抜粋した全 20 項目からなるパラノイア尺度を作成した。そして、自己意識尺度 (Fenigstein et al., 1975) と共に一般大学生に試行した。その結果、私的自己意識得点を統計的に統制した後の、パラノイア尺度得点と公的自己意識得点との偏相関は .45 と統計的に有意な正の値を示した。これに対し、公的自己意識得点を統計的に統制した後の、パラノイア尺度得点と私的自己意識得点との偏相関は .15 であった。この結果から、パラノイアに関連しているのは、公的自己意識であるとした。

自己意識と被注察感との関連

パラノイアのその他の特徴として被注察感がある。誰かに見られている感じや他者が自分に特に注目している

という考えは、パラノイアの特徴としてあげられる。そこで、Fenigstein & Venable (1992) は、被注察感と自己意識との関係を検討した。公的自己意識の高い人は、他者から自分がどのように見られているかを気にしやすいので、直接的な証拠がなくても、自己が他者の観察の対象になっていると推測しやすいと予測した。Fenigstein & Venable (1992) の第 2 実験では、被験者に双方向性のある鏡の前で、待機させたりアナグラム課題を行わせたりした。仮説では、公的自己意識の高い人は見られたり観察されいる感じを多く認めやすいと想定された。実験の結果、公的自己意識の高い人は公的自己意識の低い人に比べて、部屋にいる間、観察されていると感じやすいことが示された。

また Fenigstein & Venable (1992) の第 3 実験では、状態的な自己意識が実験的に操作された。彼らは、被験者に物語を作成するように求めた。被験者は、物語に使用する単語のリストを渡された。実験群は「I, my, me, mine, myself」などの 1 人称の単語がリストの中に含まれていた。統制群は、1 人称の単語の部分のみ全て 3 人称の単語に置き換えられたリストを渡された。1 人称の単語を使用する実験群では、3 人称の単語を使用する統制群よりも、自己に関連する単語を使用することによって状態的な自己意識が高まるように操作した。課題は双方向性のある鏡の前で行われた。その結果、実験群は統制群よりも、課題遂行中に誰かに見られていると感じやすかった。以上の結果から、自己に注意を向けるほど、自己が他者の注目の対象となっていると感じやすいとしている。

これらの一連の結果から、Fenigstein (1995) は自己意識とパラノイアとの関連を以下のように述べている。つまり、公的自己意識の高い人は、自己を社会的な対象としてみなす傾向が強い。よって、他者の行動が自己に関係していると考えることを避けることが困難である。そのような自己に関連づける推論はパラノイア思考の特徴であり、自己意識と妄想的観念との明確な関連が示唆されるとしている。

社会心理学的アプローチの問題

これらの社会心理学的アプローチにおける今後の課題の一つは、臨床群での検討である。一般青年を対象とした研究結果が、臨床群にどの程度一般化できるかについての知見が求められている。Smri, Stefansson, & Thorgilsson (1994) は、Fenigstein & Venable (1992) のパラノイア尺度と自己意識尺度を臨床群に施行した。その結果、パラノイア尺度と私的自己意識との関連がみられたが、パラノイア尺度と公的自己意識との

関連はみられなかった。よって、一般青年を対象とした研究結果の臨床群への一般化については、慎重な検討が必要とされる。

この点に関して、Smari, Stefansson, & Thorgilsson (1994) は公的自己意識の尺度項目は精神分裂病者には適切ではない可能性を指摘している。公的自己意識尺度は「出かける前には必ず鏡を見る」や「自分の外見には気を配っている」などの項目から構成されている。一般に、精神分裂病者はこれらの自己の外見にはあまり注意を向けていないことが知られている。よって、Fenigstein et al. (1975) の公的自己意識尺度を使用して精神分裂病の障害を持つ人の公的自己意識を測定しようとするならば、全体的に低い値となることが予測できる。ところが、精神分裂病の障害を持つ人は、一般に他者の評価に敏感であるとの指摘がある（星田, 1989）。他者の評価に敏感であることは、公的自己意識が高いことを意味する。このように、精神分裂病者の自己意識のあり方は、一般健常人とは異なっている可能性がある。よって、Fenigstein et al. (1975) の項目が精神分裂病者にも適応可能であるかは、慎重に検討する必要があると思われる。

精神障害者の妄想に対する心理学的アプローチ

これまで、精神分裂病や妄想性障害などに見られる妄想は、病理の指標として捉えられてきた。そのため、記述精神病理学では妄想研究が盛んに行われており、レビュー論文もいくつか見られる（例えば、阿部・宮本, 1994；笠原・藤繩, 1978；関根, 1992など）。ところが、精神病理学者や精神分析学者に比べて、一般心理学者が、精神障害者に見られる妄想に注目する機会は少なかった。この理由として、妄想は、一般健常人の思考過程からは極端にかけ離れており、一般健常人を対象として蓄積してきた一般心理学の理論では、妄想は理解不可能であると考えられていたからであるように思われる。つまり、精神障害者に見られる妄想は、一般健常人による正常な思考の過程とは質的に異なっているとされてきた（Bentall, 1994）。ところが、1980年代の後半から、精神障害者が持つ妄想に対して、心理学的なアプローチが試みられるようになってきた。この背景には、Maher (1974) や Strauss (1969) の指摘による影響がある。

Strauss (1969) は、精神分裂病の精神障害者に半構造化面接をおこなった。その結果、全ての患者について妄想・幻覚を「ある・なし」の2段階で評定することは、様々な困難が伴った。これは、半構造化面接によって質問が適切に行われ、応答があり、十分な情報が得ら

れたにもかかわらず、症状が存在したかどうか判然とできなかったケースが多かったからである。そして、妄想を「ある・なし」の2分法で考えるのではなく、連続スペクトラム上の位置で考える事が有益であるとした。

また、Maher (1974) は、妄想は異常な知覚を解釈するための合理的な推論の結果であると主張した。妄想を持っている人は、生物学的な変化に基づく知覚の異常があり、過度に生々しい感覚入力状態になっているとした。色彩の生々しさがいつもより増して経験されたり、背景の雑音が優勢になってしまったために聴覚刺激に選択的に注意を向けることが難しくなっている可能性があると指摘している。ゆえに、妄想とは、自己に起こっている体験を説明しようとする試みであり、出来事を意味づけようとする試みであるとしている。

しかし、Maher (1974) の見解には、批判もある。Garety & Freeman (1999) は、知覚の異常が見あたらない場合でも妄想を持つ場合があることを指摘し、妄想患者の推論や帰属過程には、一般統制群と比較すると異なっているという報告が多いとしている。また、知覚の異常だけでは、妄想の説明には不十分であるという指摘もある（Lyon, Kaney, & Bentall, 1994）。

これらの批判があるものの、Maher (1974) と Strauss (1969) の指摘以後、精神障害者の妄想に対する心理学的アプローチが増加することとなった。その結果、精神障害者に見られる妄想は、理解不可能ではなく、一般健常人に見られる様々な認知的バイアスが過度な形となって表れているという見方が提出されるようになってきた。

帰属過程におけるバイアス

自己奉仕バイアス 1980年代後半から、イギリスのリバプール大学の Bentall らを中心としたグループは、原因帰属理論を用いて、精神障害者の妄想を扱った。その結果、妄想を持つ精神障害者には、ネガティブな事象は外的に帰属し、ポジティブな事象は内的に帰属する自己奉仕バイアス（self-serving bias）が存在することを一貫して示した（Candido & Romney, 1990；Kaney & Bentall, 1989；Kaney & Bentall, 1992；Kinderman & Bentall, 1997b）。

妄想を持つ精神障害者の原因帰属過程を検討するためには、帰属スタイル質問紙（Attributional Style Questionnaire：以下 ASQ と略す）が、多くの研究において使用されている（Bentall & Kany, 1989；Candido & Romney, 1990；Kaney & Bentall, 1989）。ASQ は、もともと抑うつ傾向の人の認知過程を調べるために開発されたものである。6 個の肯定的な仮想場面と、6

妄想的観念および妄想に関する研究の概観

個の否定的な仮想場面から構成されている。回答者は、そうなった仮想場面の理由を1つ記述するように求められる。そして、その記述について、3つの次元から7段階で評定するように求める。3つの次元とは、①内的（自分の内的な要因のせいか、もしくは状況や他者などの外的な要因のせいかのどちらかに帰属される程度）②安定的（将来もその理由が起こるであろう程度）③全般的（原因が質問紙に記述されている以外の出来事にも影響を及ぼす程度）の3つである。ASQを用いた研究では、抑うつな人は、否定的な出来事を過度に内的で全般的で安定的とみなしやすいことが示されている。一方、被害妄想を持つ人は抑うつ患者や一般対照群に比べて、否定的な出来事を過度に外的で全般的で安定的とみなしやすく、肯定的な出来事を過度に内的で全般的で安定的とみなしやすいことが示されている（Candido & Romney, 1990；Kaney & Bentall, 1989；Lyon et al., 1994）。

しかし、ASQには問題点も指摘されている。その一つは、ASQの信頼性が低いことである。特に内的次元における信頼性の低さが報告されている。また、ASQでは内的一外的領域を、主として自分が原因で起こったか、それとも他者の原因や偶然によって起こったかの1次元で測定していた。しかし、このような原因帰属は困難であるという指摘がある（White, 1991）。Kaney & Bentall (1989) は、Levenson (1974) の「内的・偶然・強力な他者」の3つの次元で原因帰属を調べた結果、妄想患者は統制群に比べて、偶然の次元よりも、強力な他者の次元に原因帰属する傾向があることを見出している。つまり、妄想患者が外的な原因帰属を行う際には、外的次元の中でも、偶然要因よりも他者の要因に帰属させやすいことが示唆される。ASQで妄想患者の原因帰属を検討するならば、これらの妄想患者と一般健常人の違いは判別できることになり、問題となる。

そこで、これらのASQにおける問題点を解決するために、Kinderman & Bentall (1996a) は、内的対人状況帰属質問紙 (The Internal, Personal and Situational Attributions Questionnaire: 以下IPSAQと略) を作成した。構成内容としては、16項目のpositiveな状況と、16項目のnegativeな状況が想定されている。そして、それぞれの状況について、相手のとった行動のもっともらしい理由を一つ記述することが求められる。記述された回答は、内的か (internal: 回答者に関連した理由か)、対人外的か (personal-external: 登場人物以外に関連した理由か)、もしくは状況外的か (situational-external: その場の状況や偶然に関連した理由か) のいずれにあてはまるかを、被験

者に求める。IPSAQでは、ASQが1次元で測定していた内的次元を、内的、対人外的、状況外的の3つの次元に細分して測定している。この点が、IPSAQの大きな特徴となっている。

Kinderman & Bentall (1997b) は、IPSAQを妄想患者群と抑うつ患者群および一般対照群に施行した。その結果、妄想患者群と一般対照群は、否定的な出来事に比べて肯定的な出来事を内的に帰属する、自己奉仕バイアスが見られた。また、妄想患者群は抑うつ患者群や一般対照群に比べて、否定的な出来事を対人外的に帰属していた。加えて、妄想患者群は、否定的出来事を肯定的な出来事よりも多く、対人外的に帰属していた。つまり、IPSAQを使用することによって、妄想患者は否定的な出来事を外的に帰属する際、偶然や状況などの状況外的に帰属するよりも、当事者である相手に帰属しやすいことを示した。

妄想患者における自己奉仕バイアスの存在は、帰属スタイルを測定する質問紙以外にも、コンピューターゲームを用いた随伴性判断課題の方法によっても示されている（Kaney & Bentall, 1992）。以上のように、妄想患者は抑うつ患者や一般対照群に比べて、ネガティブな事象は外的に帰属し、ポジティブな事象は内的に帰属する自己奉仕バイアスが一貫してみられている。これらの自己奉仕バイアスは、一般的な人において広く確認されており、肯定的な自己概念を保つためであるとされている（Tennen & Herzberger, 1987）。よって、肯定的な自己概念を保持するために一般の人に見られる自己奉仕バイアスが、過度になった形となったものが被害妄想なのではないかとの指摘がある（Bentall, 1994）。

妄想患者が抑うつ患者と同様の帰属をする場合 これらのように、妄想患者においては自己奉仕バイアスの存在が一貫して示されている。しかし、これらの自己奉仕バイアスは、明白な顕在的測定法を使用したときにのみあてはまるという指摘がある。つまり、一見して帰属過程を調べていると分からぬ場合には、妄想患者は抑うつ患者と類似した帰属を行うとの指摘がある（Lyon et al., 1994）。

Lyon et al. (1994) は、実用推論課題 (The Pragmatic Inference Task) を使用して、被害妄想患者と抑うつ患者と一般統制群の帰属過程を検討した。実用推論課題は、Winters & Neale (1985) によって作成された課題である。意識的なバイアス反応を防ぐために、被験者には記憶課題と教示されるものの、実際は帰属過程を調べる目的で使用する。被験者には記憶課題と教示されるため、原因帰属を測定していることは分からないとされている。実用推論課題と ASQ (正確には ASQ

の平行版)を妄想患者群と抑うつ患者群と一般対照群に施行した結果、ASQでの帰属のパターンは、肯定的な事象を内的に、否定的な事象を外的に帰属していた。これに対し、実用推論課題での帰属のパターンは、肯定的な事象を外的に、否定的な事象を内的に帰属しており、抑うつ患者と同じパターンとなった。

以上のように、妄想患者は明白な責任判断を求められた時には防衛的な帰属を行う一方、潜在的な責任判断の時にはそのような防衛的帰属が働く、抑うつ患者と同様の帰属を行うことが示されている。一般的に精神障害者においては自尊心が低いけれども、妄想患者は自尊心が高いという報告がある(Havner & Izard, 1962)。一方では、妄想患者は潜在的には否定的な自己概念を持っており、顕在的には否定しているという仮説を支持する研究もある。これは、潜在的な否定的自己表象のもとで、肯定的な自己を保とうとする試みと解釈できる(Bentall, 1994; Kinderman & Bentall, 1998)。これらの帰属スタイルの結果より、妄想は根底にある自尊心の低さから患者を保護する働きを持っていると、Bentall, Kinderman, & Kaney (1994)は示唆している。

自己不一致理論による妄想の理解 以上の帰属過程におけるバイアスを総合すると、妄想患者は、潜在的には抑うつ患者と同様な原因帰属を行っており、低い自尊心から肯定的な自己概念を保つために、否定的出来事を外的に帰属する自己奉仕バイアスが働いていると考えられる。これらの結果から、Bentallらは、Higgins (1987)の自己不一致仮説(self-discrepancy theory)を被害妄想患者に適用している(Bentall, 1994; Kinderman & Bentall, 1996b)。

Kinderman & Bentall (1996b)は、自己質問紙を改良した個人素質質問紙(The Personal Qualities Questionnaire)を使用して、被害妄想患者の自己不一致を検討した。その結果、被害妄想患者群は、抑うつ患者群に比べて、現実自己と理想自己および、現実自己と義務自己との一致度が、共に高いことを見出している。個人素質質問紙は、自己質問紙に他者からの視点を導入する際、被験者の親がとらえていると思われる自己信念の特性を記述するように、被験者に求めるよう変更が加えられている。親が捉えていると思われる自己信念について検討した結果、親から見た現実自己の領域において、被害妄想患者群と一般対照群では違いがあった。被害妄想患者群は、親から見た現実自己の領域で、否定的な単語を有意に多く使用していた。また、現実自己と親から見た現実自己との間における不一致のあり方に、被害妄想患者群と抑うつ患者群で違いがあった。被害妄想患

者群は、現実自己が肯定的であったために、現実自己と親から見た現実自己との間に不一致が起こっていた。一方、抑うつ患者群では、現実自己が否定的であったために、現実自己と親から見た現実自己との間に不一致が起こっていた(Kinderman & Bentall, 1996b)。このように、妄想患者群と抑うつ患者群および一般健常群との間には、自己不一致のあり方に異なったパターンがみられている。

ここで、原因帰属と自己不一致のあり方を整理する。失敗などの否定的出来事を自己に帰属するならば、現実自己は否定的になる。よって、現実自己と理想自己の不一致が活性化される。これとは反対に、否定的な出来事を他者のせいであるとするならば、過度に現実自己が否定的になることはない。したがって、現実自己と理想自己の不一致が活性化することはない。ところが、否定的な出来事の責任が他者にあるとみなすので、現実自己と他者から見た現実自己との間の不一致は大きくなる。自分に起きた否定的な出来事について他者を非難するなら、その他者が自分を非難して、自己を否定的にとらえると考えると予想できる(Kinderman & Bentall, 2000)。

一方、否定的な出来事を状況外的に帰属するならば、否定的な出来事を原因を誰のせいにもしないということで、比較的無害である。したがって、否定的な出来事を状況外的に帰属する場合は、現実自己と理想自己との不一致と、現実自己と他者から見た現実自己との不一致が共に減少する(Kinderman & Bentall, 1998)。

以上より、Bentall et al. (1994)は、次の点を示唆している。それは、被害妄想の患者は、自己不一致が起こりそうな脅威的な出来事やネガティブな刺激に直面する時、そのような否定的な出来事を対人外的な要因に帰属させることによって自己不一致を最小化しようと試みる結果、被害念慮が生じると考えられる点である。つまり、妄想患者における被害念慮は、他者が自己を否定的に見ていると認知するという犠牲を払うことによって、現実自己と理想自己の不一致を積極的に軽減しようとしている妄想患者の試みであると考えられる。これに対し、一般健常人は否定的な出来事を外的に帰属する際、当事者の相手ではなく状況外的な要因に帰属させる。よって、誰かに出来事の原因を求めるわけではないので、誰かに害が及ぶことはなく、被害念慮が高まることもない。上述した被害妄想における自己不一致と帰属スタイルのモデルは、精神分裂病における自尊心の研究の矛盾を説明できるだけでなく、妄想患者における帰属スタイルのバイアスを説明できる(Bentall et al., 1994)。

確率推論におけるバイアス

潜在的な自尊心の低さからくる自己不一致を防衛するための帰属過程におけるバイアスの他に、確率判断のバイアスを指摘する研究がある。それによると、妄想患者は、確率判断の課題において健常群よりもより少ない情報で判断を下しやすいという、「性急な結論づけ傾向 (jump to conclusion)」があるとされている (Huq, Garety, & Hemlsy, 1988 ; Garety, Hemsley, & Wessely, 1991)。これらの研究においては、ベイズモデルにおける確率推論アプローチの有効性を指摘している (Hemsley & Garety, 1986)。

妄想患者における確率判断のバイアスを検討している多くの研究では、Phillips & Edwards (1966) の典型的な実験パラダイムを使用している。典型的な実験では、被験者は2組のA, B, とラベルづけされた壺を見せられる。壺の中には2色のビーズが入っている。例えば、85個の緑のビーズと15個の赤のビーズあわせて100個が入っており、もう一つの壺は逆の割合で入っている。被験者は割合について知られた後、壺は目の前から移動されて、被験者からは見えなくなる。そして、2つの壺のうちどちらかの壺がランダムに選択されると被験者に告げられる。よって、ベイズ理論における事前確率は50%である。ランダムに選択された壺からビーズが取り出され、被験者に見せられる。その後ビーズは選択された壺に戻される。このやりとりが繰り返される。課題は、実験者がAかBのどちらの壺からビーズを取り出しているか、当てることである。

ところが実際には、被験者に見せられるビーズの色のパターンは、あらかじめ実験者によって決められている。典型的な実験では「結論確定」条件と「確率推測」条件の2つがある。「結論確定」条件では、ビーズを取り出す回数は自由であり、被験者が自分の答えに確信を持てたときにビーズの取り出しを終了する。よって、ビーズを取り出す回数が、判断材料として結論を確定するためにどれだけ情報を集めるかの指標となる。「確率推定」条件では、ビーズを実験者が取り出す回数はあらかじめ決まっている。被験者はおのの段階で、どの程度自分の答えに自信があるかたずねられる。なお、ベイズ理論によってこれらの課題の最適解は算出される。

上記のアプローチによって、妄想患者は「結論確定」条件のビーズの取り出し回数が一般対照群や臨床対照群よりも有意に少なく、妄想患者における性急な結論づけ傾向が示されている (Huq, Garety, & Hemlsy, 1988 ; Garety, Hemsley, & Wessely, 1991)。

なお、Huq et al. (1988) では、妄想患者は「結論確定」条件において平均2.22回ビーズを取り出した時に結

論を出している。これに対し、一般対照群は3.60回であり、臨床対照群は4.58回であった。およそ2回ビーズを取り出ただけで結論を出すのは性急すぎるようと考えられよう。ところが、ベイズ理論によって確率を計算すると、ビーズを2回取り出して2個とも緑だった時にAの壺から取り出されている確率は、97%となる。よって、ベイズ理論によって算出される最適解からみると、妄想患者は、「合理的」な判断をしており、むしろ一般対照群は過度に保守的すぎる判断をしているといえる。これらの結果から妄想患者は一般対照群よりも推論が良好であると結論するのではなく、一般対照群に存在する保守的なバイアスが妄想患者では弱まっていると考えるべきであろう (Huq et al., 1988)。

情報処理過程におけるバイアス

帰属過程や確率推論におけるバイアスの他に、情報処理におけるバイアスを指摘する研究もある。それによると、妄想を持つ患者は、脅威的な記憶が活性化されやすいことが示されている (Bentall, Kaney, & Bowen-Jones, 1995 ; Kaney, Wolfenden, Dewey, & Bentall, 1992)。Bentall, Kaney, & Bowen-Jones (1995) は、妄想患者と抑うつ患者と一般対照群に、単語のリストについて再生を求める課題を行った。教示された単語のリストは、脅威に関連した単語、抑うつに関連した単語、中性的な単語の3種類から構成されていた。その結果、抑うつ患者は抑うつに関連した語にのみ想起におけるバイアスがあったのに対し、被害妄想の患者は、脅威に関連した語と抑うつに関連した単語両方に、想起におけるバイアスがあった。また、Kaney, Wolfenden, Dewey, & Bentall (1992) は、被害妄想患者と抑うつ患者と一般対照群に、脅威的な主題を含む物語の記憶課題を行った。その結果、被害妄想の患者は、全般的に思い出した情報量は少ないにもかかわらず、脅威に関連した内容に関しては、抑うつ患者や一般人に比べて多く思い出していた。

以上の結果を総合すると、被害妄想患者においては、抑うつ患者にみられるような情報処理におけるバイアスの存在が示唆される。抑うつ患者が否定的な素材に対して選択的に注意が作用するバイアスがあるのに対して、被害妄想患者は、個人の脅威に関連した素材に対して選択的に注意が作用するバイアスがあるといえる (Bentall et al., 1994)。

心の理論における障害

他者の信念や欲求について理解することや、直接的な言葉の裏にある他者の真の意図に気づくことは、重要な

認知的能力であり、対人関係をスムーズに営むためにも必要な能力とされる。ところが、精神分裂病者においては、これらの他者の意図を理解することに困難が伴うことは以前から注目されていた。また、被害妄想や恋愛妄想などの様々な妄想は、他者の行動や意図の誤った解釈によって特徴づけられる。よって、これらの症状は、他者の心的状態を推論する能力の欠損の結果であると主張する研究者もいる (Corcoran, Mercer, & Frith, 1995)。他者の心的状態から行動を説明する能力は、「心の理論 (Theory of mind)」を持つという観点から発達心理学の領域で精力的に検討されている。近年は、精神分裂病者において心の理論を検討している研究が増えてきている (Corcoran, Cahill, & Frith, 1997 ; Corcoran, Mercer, & Frith, 1995 ; Doody, Goetz, Johnstone, Frith, & Cunningham Owens, 1998 ; Sarfati, Hardy-Bayle, Besche, & Widlocher, 1997)。それらによると、精神分裂病患者は健常者や抑うつ患者よりも、間接的な会話の意図をうまく理解できなかったり (Corcoran et al., 1995), 1コママンガにおいて主人公の心的状態を的確に推論するのが難しく (Corcoran et al., 1997), 二次的信念の課題通過に困難を示す (Doody et al., 1988) ことなどが示されている。

妄想的観念と妄想との連続性

一般に、妄想は以下のように定義される。①その考えに並々ならぬ確信をいだいていること（並々ならぬ主観的確信）②経験や人の説得によっても訂正されないこと（訂正不能性）③その内容が非現実的で不可能であること（内容の不可能性）の3点である。そして、精神障害者に見られる妄想は健常者との非連続性が強調されてきた。たとえば Jaspers (1913) は、信念の形態を、正常の信念、支配観念、妄想様観念、一次妄想の4つに分類した。そして、正常の信念と支配観念は、正常な精神状態で生じるものとした。一般に妄想というのは、妄想様観念と一次妄想をさす。妄想様観念は、その発生が心理学的に了解可能なものであるとされる。これに対し、一次妄想は、他の精神病理的症状から導き出せない「了解不能」なものとされており、精神分裂病に特異的なものであるとされている。すなわち、一次的病的体験が源となっているような妄想、あるいはそれを説明するに人格変化を前提とする必要があるような妄想をさす。よって、精神分裂病における一次妄想は、心理学的に了解不可能であるとされてきた。

妄想が発生しやすい条件

上記のように、精神障害者にみられる妄想は、一般健常人との非連続性が強調されている。ところが、一般の人でも、幻覚や妄想を発達させやすい条件が知られている。一つは、睡眠不足を伴う限界状況での心身疲労である。もう一つは、周囲とのコミュニケーションが妨げられる状態である。

笠原・藤繩 (1978) は、健常人の短期の妄想形成の事例を紹介している。大学の教員であり、不眠不休で学園紛争の団交を積極的に行った結果、地下鉄の中で過激派学生に追跡されているという妄想が発生し、2日の休眠のみで回復したケースである。笠原・藤繩 (1978) は、当該ケースにおける妄想形成の背景要因として、睡眠不足を伴う心身疲労をあげている。また、断食を伴う武者修行や雪山での遭難時など、生命生存の極限状態においては、幻視を伴う幻覚状態になりやすい事がよく知られている。荻野 (1968) は、雪山遭難時に一般青年が体験した幻覚を報告している。そして、幻覚発生に関与する第1の要因として、睡眠不足、飢餓、心身の疲労などの身体的条件をあげている。これらのように、極度の睡眠不足を伴い、限界状況における心身疲労状態では、一般的な人においても、短期的な幻覚や妄想を発生しやすい。

さらに、周囲の人とコミュニケーションがとれない状態では、妄想が発達しやすくなることも知られている。Zimbardo, Andersen, & Kabat (1981) は、男子大学生を対象にして、聴覚障害を催眠によって引き起こす実験を行った。その結果、催眠によって聴覚障害を引き起こされていると教示がなかった群は、パラノイア的になっていることを示した。この他にも、知覚遮断や拘禁、留学などの周囲とコミュニケーションがうまく取れない状態では、妄想を発達させやすいことが知られている。これらように、過度に極端なストレス状態に陥った場合には、幻覚妄想状態になりやすい。

パラノイアスペクトラム

上に述べたように、極限の心身疲労状態やストレス状態におかれると、一般健常人でも妄想形成を起こしうる。また、臨床現場においては、背景化していた妄想の内容がストレスの増加をきっかけとして拡大したり、強固だった妄想が精神障害の回復期に「どうしてあんなことを考えたのだろう」と、自ら疑問に思ったり (星田, 1989) することなどが頻繁に観察される。このように、妄想の確信度や内容の広がりは、病状の進行によって変動する場合が多く見られる (Brett-Jones, Garaty, & Hemsley, 1987 ; 笠原・藤繩, 1978 ; 高橋, 1999)

そこで、健常者にみられる妄想的観念と精神障害者に

妄想的観念および妄想に関する研究の概観

みられる妄想および妄想様観念との間に連続性を仮定し、スペクトラムとしてとらえる研究者もいる（笠原・藤繩、1978；丹野ら、2000）。また、阿部・宮本（1994）は、正常の信念から妄想様観念までは一定の連続性があることを認めている。これらのパラノイアスペクトラムの立場に立つならば、精神障害者の妄想は理解不可能ではなく一般健常人にみられる様々な認知的バイアスが極端になって表れた形であると考ることになり、ひいては精神障害への理解の促進にもつながると思われる。もちろん、拡大解釈を防ぐために、どの程度まで連続性が仮定できるのかについては、慎重に判断する必要があると思われる。

今後の課題

妄想的観念のアナログ研究

近年、抑うつや強迫症状などの臨床的な問題を対象に、アナログ研究が盛んに用いられている（たとえば、坂本、1997など）。アナログ研究とは、一般健常人である非臨床サンプルに精神障害の症状を測定する自己記入式質問紙を使用して行った研究である。非臨床サンプルに行った結果から、臨床群における精神障害の心理的過程を類推する手法をとる。アナログ研究については、多くの利点がある（坂本、2000）。妄想的観念についてのアナログ研究は、最近になって報告が増えつつある（Fenigstein & Venable, 1992；金子、1999；2000；丹野ら、2000）。ところが、妄想的観念については、未解明な部分も数多く残されている。その一つとして、多くの一般青年が妄想的観念を体験しているにもかかわらず、妄想状態に陥らずに生活できているのはなぜかという問い合わせられる。アナログ研究を用いることにより、これらの未解明な部分を徐々に明らかにしていくことが可能と思われる。臨床的介入に役立てるためにも、さらなる知見の蓄積が求められている。

認知行動療法による妄想への臨床的介入

元来、精神病は異常であり、妄想などの陽性症状には心理的治療が積極的に行われることはなかった。ところが、幻聴や妄想などの陽性症状に対して認知行動療法を適用した報告が、近年になってなされるようになってきた。その結果、症状の改善をもたらしたという報告が増えてきている（Chadwick & Lowe, 1994；Kinderman & Bentall, 1997a；町沢静夫、1999）。また、妄想への認知行動療法による具体的な介入法についても、体系化したテキストが出版されている（Chadwick, Birchwood, & Trower, 1996）。今後は、一般健常人における妄想的観念や、精神障害者における妄想研究の

知見を積み重ねながら、これらの問題への積極的な介入が望まれる。

引用文献

- 阿部隆明・宮本忠雄 1994 妄想研究の現状 精神医学, 36, 340-352.
- Bentall, R. P. 1994 Cognitive biases and abnormal beliefs: Towards a model of persecutory delusions. In David, A. S., & Cutting, J. C. (Eds.), *The neuropsychology of schizophrenia*. Brain damage, behaviour and cognition series. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 337-360.
- Bentall, R. P., Kaney, S., & Bowen-Jones, K. 1995 Persecutory delusions and recall of threat-related, depression-related, and neutral words. *Cognitive Therapy & Research*, 19, 445-457.
- Bentall, R. P., Kinderman, P., & Kaney, S. 1994 The self, attributional processes and abnormal beliefs: Towards a model of persecutory delusions. *Behaviour Research & Therapy*, 32, 331-341.
- Brett-Jones, J. R., Garety, P. A., & Hemsley, D. R. 1987 Measuring delusional experiences: A method and its application. *British Journal of Clinical Psychology*, 26, 257-265.
- Candido, C. L., & Romney, D. M. 1990 Attributional style in paranoid vs. depressed patients. *British Journal of Medical Psychology*, 63, 355-363.
- Chadwick, P. D., Birchwood, M. J., & Trower, P. 1996 *Cognitive therapy for delusions, voices and paranoia*. Chichester: John Wiley & Sons.
- Chadwick, P. D. J., & Lowe, C. F. 1994 A cognitive approach to measuring and modifying delusions. *Behaviour Research & Therapy*, 32, 355-367.
- Corcoran, R., Cahill, C., & Frith, C. D. 1997 The appreciation of visual jokes in people with schizophrenia: A study of 'mentalizing' ability. *Schizophrenia Research*, 24, 319-327.
- Corcoran, R., Mercer, G., & Frith, C. D. 1995 Schizophrenia, symptomatology and social

- influence: Investigating "theory of mind" in people with schizophrenia. *Schizophrenia Research*, 17, 5-13.
- Doody, G. A., Goetz, M., Johnstone, E. C., Frith, C. D., & Cunningham Owens, D. G. 1998 Theory of mind and psychoses. *Psychological Medicine*, 28, 397-405.
- Fenigstein, A. 1984 Self-consciousness and the overperception of self as a target. *Journal of Personality & Social Psychology*, 47, 860-870.
- Fenigstein, A. 1995 Paranoia and self-focused attention. In Oosterwegel, A., & Wickland, R. A. (Eds.), *The self in European and North American culture: Development and processes*. Dordrecht, Netherlands, Kluwer Academic Publishers: 183-192.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Fenigstein, A., & Venable, P. A. 1992 Paranoia and self-consciousness. *Journal of Personality & Social Psychology*, 62, 129-138.
- Garety, P. A., & Freeman, D. 1999 Cognitive approaches to delusions: A critical review of theories and evidence. *British Journal of Clinical Psychology*, 38, 113-154.
- Garety, P. A., Hemsley, D. R., & Wessely, S. 1991 Reasoning in deluded schizophrenic and paranoid patients: Biases in performance on a probabilistic inference task. *Journal of Nervous & Mental Disease*, 179, 194-201.
- Hemsley, D. R., & Garety, P. A. 1986 The formation of maintenance of delusions: A Bayesian analysis. *British Journal of Psychiatry*, 149, 51-56.
- Huq, S. F., Garety, P. A., & Hemsley, D. R. 1988 Probabilistic judgements in deluded and non-deluded subjects. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 40A, 801-812.
- Havener, P. H., & Izard, C. E. 1962 Unrealistic self-enhancement in paranoid schizophrenics. *Journal of Consulting Psychology*, 26, 65-58.
- Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- 昼田源四郎 1989 分裂病者の行動特性 金剛出版
- ヤスパーク K. 1971 西丸四方(訳)精神病理学原論
みすず書房 (Jaspers, K. 1913 Allgemeine Psychopathologie. Berlin: Springer.)
- 金子一史 1999 被害妄想的心性と他者意識および自己意識との関連について 性格心理学研究, 8, 12-22.
- 金子一史 2000 青年期心性としての自己関連づけ 教育心理学研究, 48, 473-480.
- Kaney, S., & Bentall, R. P. 1989 Persecutory delusions and attributional style. *British Journal of Medical Psychology*, 62, 191-198.
- Kaney, S., & Bentall, R. P. 1992 Persecutory delusions and the self-serving bias: Evidence from a contingency judgment task. *Journal of Nervous & Mental Disease*, 180, 773-380.
- Kaney, S., Wolfenden, M., Dewey, M. E., & Bentall, R. P. 1992 Persecutory delusions and recall of threatening propositions. *British Journal of Clinical Psychology*, 31, 85-87.
- 笠原嘉・藤繩昭 1978 妄想 大橋博司・保崎秀夫(編)
現代精神医学大系3A精神症候学 I 中山書店 Pp. 233-338.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1996a A new measure of causal locus: The Internal, Personal and Situational Attributions Questionnaire. *Personality & Individual Differences*, 20, 261-264.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1996b Self-discrepancies and persecutory delusions: Evidence for a model of paranoid ideation. *Journal of Abnormal Psychology*, 105, 106-113.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1997a Attribution therapy for paranoid delusions: A case study. *Behavioural & Cognitive Psychotherapy*, 25, 269-280.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1997b Causal attributions in paranoia and depression: Internal, personal, and situational attributions for negative events. *Journal of Abnormal Psychology*, 106, 341-345.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 1998 The clinical implications of a psychological model of paranoia. In Sanavio, E. (Ed.), *Behavior and cognitive therapy today: Essays in honor of Hans J. Eysenck*. Oxford: Elsevier Science.

妄想的観念および妄想に関する研究の概観

- Pp. 131-162.
- Kinderman, P., & Bentall, R. P. 2000 Self-discrepancies and causal attributions: Studies of hypothesized relationships. *British Journal of Clinical Psychology*, 39, 255-273.
- Levenson, H. 1974 Activism and powerful others: Distinctions within the concept of internal-external control. *Journal of Personality Assessment*, 38, 377-383.
- Lyon, H. M., Kaney, S., & Bentall, R. P. 1994 The defensive function of persecutory delusions: Evidence from attribution tasks. *British Journal of Psychiatry*, 164, 637-646.
- 町沢静夫 1999 分裂病者の妄想に対する認知療法的試み 精神療法, 25, 225-231.
- Maher, B. A. 1974 Delusional thinking and perceptual disorder. *Journal of Individual Psychology*, 30, 98-113.
- 荻野恒一 1968 限界状況における集団的幻覚体験について—冬山遭難時の幻覚の現象学的記述と精神医学的考察 精神医学, 10, 79-84.
- Phillips, L. D., & Edwards, W. 1966 Conservatism in a simple probability inference task. *Journal of Experimental Psychology*, 72, 346-354.
- 坂本真士 1997 抑うつと自己注目の社会心理学 東京大学出版会
- 坂本真士 2000 アナログ研究 下山晴彦(編) 臨床心理学研究の技法 福村出版 Pp. 119-125.
- 関根義夫(編著) 1992 精神医学レビュー No. 5 妄想 ライフ・サイエンス
- Smari, J., Stefansson, S., & Thorgilsson, H. 1994 Paranoia, self-consciousness, and social cognition in schizophrenics. *Cognitive Therapy and Research*, 18, 387-399.
- Strauss, J. S. 1969 Hallucinations and delusions as points on continua function. *Archives of General Psychiatry*, 20, 581-586.
- 高橋俊彦 1999 妄想の精神病理学—パラノイア患者への精神亮法的接近— 精神療法, 25, 196-204.
- 丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典 2000 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成 心理学研究, 71, 379-386.
- Tennen, H., & Herzberger, S. 1987 Depression, self-esteem, and the absence of self-protective attributional biases. *Journal of Personality & Social Psychology*, 52, 72-80.
- Winters, K. C., & Neale, J. M. 1985 Mania and low self-esteem. *Journal of Abnormal Psychology*, 94, 282-290.
- White, P. A. 1991 Ambiguity in the internal/external distinction in causal attribution. *Journal of Experimental Social Psychology*, 27, 259-270.
- Zimbardo, P. G., Andersen, S. M., & Kabat, L. G. 1981 Induced hearing deficit generates experimental paranoia. *Science*, 212, 1529-1531.

(2001年9月20日 受稿)

原 著

ABSTRACT

Reviews of Paranoid Ideation and Delusions

Hitoshi KANEKO

The purpose of this study was to review empirical studies that paranoid ideation in normal young adult population and delusions in clinical population. Two approaches were carried out to paranoid ideation and delusions. One is that investigations about normal young adult population from social psychological perspectives. Self-consciousness theory were applied to these studies . The other is that experimentations and investigations about clinical population with delusions. The Latter approach found out attributional and reasoning biases in people with delusions which suggests they may display in general population. We discussed continuum from paranoid ideation to delusions.

Key wards : paranoid ideation, delusions, paranoia spectrum, attributions, cognitive biases